
涼宮ハルヒの平凡な日常

輝神大將軍獅龍凰

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

涼宮ハルヒの平凡な日常

【Nコード】

N08770

【作者名】

輝神大將軍獅龍凰

【あらすじ】

涼宮ハルヒとみなみけのコラボです

下手なりに頑張ってみた感じです

今日のSOS団の活動は、いつもながらの暇潰しになっていた。
俺と古泉がボードゲームをして、長門が読書、朝比奈さんもお茶の本を読んでいて、至って平和だ。

「おつまたせ〜!」

ドカンと言う扉の開閉音と共に、静かで平穏な文芸部室の空気は一掃された。

このSOS団の団長であり自称絶対不可侵な存在、涼宮ハルヒが現れたのである。

「ハイ、んじゃあ入って入って〜」

ハルヒが入室してから、見知らぬ女子生徒が入って来た。

何の脈絡もないまま、数分間の事情聴取が始まった。

南春香さんという女生徒は、近頃校内で誰かとも解らない怪しい視線を感じ不安な日々を送っているのだとか。

しかもその正体が解らずに友達にも相談出来ないでいるそうなの。

これはつまり喜緑さん以来の、しかも正式に団を頼って来た久々の依頼人なわけだ。

「怪しいわね。この学校に潜む変な妖怪が何かに……」

ハルヒがブツブツ言ってる横で、俺はため息をついた。なんかオチが見えちゃった気がする。こんな美人相手だ。ストーリー力や変態の類が生徒内部に居ても変ではない。余り乗り気では無い

が、前回の喜緑さんの件があるし油断出来ないのが残念。
またカマドウマとか出ないかと長門に視線を送る。

「……」

読書をやめて、南さんを見つめている。真剣な表情というかポーカーフフェイスだ。

「とりあえず、南さんの近辺を調査してみてもどうでしょうか？」

古泉がハルヒに言うのを見て、もしや機関が何か絡んでいるのではと思ってしまう。しかし古泉は俺と目が合うと、ニヤケ面から真面目な表情へ変貌し、首を横に振った。辞めろ、その「考えてる事分かってますよ」的な言動は。

とにかく、次の日から南さんの近辺を調査する事が始まった。

俺達は二年生校舎に休み時間、頻繁に出入りし続けていた。主に朝比奈さんメインで調査していたが…その、やっぱり鶴屋さんとかに拉致されたら戦力外だから、俺達が出向くしかなかったのだ。

「それでだハルヒよ…」

自習時間中、俺は真後ろの席に体を向ける。

「初日にして視線を送る犯人は見つかったわけだが…どうする？」

ハルヒはつまらなさそうな顔をするかと思いきや、ニヤついて考え込む表情になる。

「あのバレー部の部長さんは、あんたと古泉君…有希に任せるわ。」

ハルヒ的に、犯人と関わるのが嫌なのだろう。俺だって嫌だ。古泉に任せたいのだが、珍しく嫌がったのだ。

「それよりさ……南春香さん。あの人、中学の時に番長やってたんだってさ」

その言葉に、俺は興味を持ち耳を傾ける。番長だって？そんなの昭和の遺物じゃないのか？

「噂なんだけどね。校舎の窓を全て叩き割り、教師に花瓶の水を掛け、群がる男をバツバツと……」

もし、それが本当なら警戒すべきはバレー部部长ではなく、彼女のほうではなからうか？

「私とみくるちゃんは番長の方を聞き込みで調べるわ。そっちの方が面白そうだし」

どっちも危険な気がするが……

そして昼休み。

「いるなやつぱり……」

南さんは友人達と仲良く話をしている。

教室の戸口に背を預ける男は、天を仰ぐかの如く顔を上に向けて目を細める。

「だ……誰が声をかけるんだ？」

俺は古泉と長門を交互に眺めてから、ワイシャツを第三ボタンまで開けた男に視線を戻す。弁当を持ち、二年生の教室の前。どこの恥ずかしがり屋な乙女だ。

「ここは公平にジャンケンで決めましょうか」

一切の特殊能力を禁じると、長門に言い加えておく。じゃんけん、ポン。

「……負けてしまいましたか」

俺と長門がチヨキ。古泉がパーという結果だ。ざまあ見やがれ。と半笑いで言ってやるも、内心自分が負けなくて安堵していた。

「ちゃんと後に着いて来て下さいよ？正直、神人を相手にするより緊張感が……」

ぐだぐだ話そうとする古泉の背中を、俺と長門が押す。

「あの……保坂先輩ですよね？一年の古泉という者ですが」

振り返る保坂先輩。何故一秒一秒格好を付けるんだ？振り返りながら前髪をフサリと上げる仕草が気持ち悪い。

「君は？バレー部に入部希望の方か？」

「いえ、僕は南春香先輩の事で……」

保坂先輩の目の色が変わる。嫌な予感がするな。

「何？この俺に南春香の魅力について語れと？」

聞いちゃいねえし、会話になってないぞ先輩さんよ。

「まず、南春香の美しい瞳。その瞳は……」

ワイシャツのボタンを一つ外す。

「あの……保坂先輩？」

「そして清純なイメージに合う長い髪は……」

一つ、また一つボタンを外して行き胸腹全開になった。流石の古泉も後退りする。何故脱ぐ？脱ぐタイミングか？ここ。

「保坂先輩はお弁当片手に、何をやってるんです？ここで」

古泉が尻込みしているので、仕方なく俺が保坂先輩に声をかけた。こつ言った人の話を聞かない奴には強引さが必要だからな。

「弁当？ああ、そうだ。俺はこの弁当を南春香に渡すために、こつでこつしているわけだ」

またしても格好つけたポーズ。彼にペースを掴ませてはいけない。話が進まないからな。

「その弁当は手作りですよ？他から見て先輩のやってること……」

俺は言葉を途切らせざるをえなかった。

何故なら保坂先輩は、既に俺の言葉を聞かずトリップしていたからだ。

「……………わけだ……」

一人でブツブツと、目を閉じて語り始めた。

「すると南春香は、涙を流して喜ぶわけだ……」

喜ぶか。俺には涙を流して逃げ惑う南さんの姿が目には浮かぶ。彼は妄想の世界で幸せな一時を過ごしているのだろう。かける言葉が無い俺、古泉、長門。

「アハハ、アハハ、アハハハハハ、アハハ、アハハハハハ！」

突然、両手を広げ笑い始めた。こいつはヤバイ！打つ手が無くなつて俺も後退り。

もはや長門様の出番だ。

「……………撤退するべき。もはやどうする事も出来ない」

長門は保坂先輩に背を向けた。待て長門。それじゃあ依頼を処理出来ないだろ？

「情報連結解除の申請……………する？」

珍しく質問風に聞いて来た。

つて、そんな事しちゃいけません。

「では……………海外に留学した事にする」

長門は限界みたいだ。

「……気持ち悪い」

初めて長門とハモった。

その後バレー部の速水先輩という女子が来て、その場をおさめてくれた。保坂先輩が今まで以上に距離を置いて、南春香さんを見守るとの事だ。

解決には至らないが、不快な視線が遠くになっただけマシだろう。

「そんなわけだが……俺達はどこに向かっているんだ？」

放課後になり、SOS団御一行は校舎を出て外を歩いている。

「ある筋の情報なんだけどね。番長伝説は四代目まで受け継がれて、初代番長の妹と四代目が仲良い所まで掴んだのよ。」

初代番長が南春香さん、二代目が不明で、三代目と四代目は近場の中学に通っているとの事らしい。きっと南先輩の友人あたりが面白がってハルヒに協力し、情報を流したのだろう。

「つまり、その番長がいる中学に向かうと？」

ハルヒがニヤけながら俺を見る。

「相変わらず甘いわね馬鹿キョン。南さんの自宅の場所も聞いたから、まず四代目番長と仲のいい妹から攻略するわけよ」

ハルヒにしては姑息だな。しかし、中学生とは言え番長相手に正面切って会いに行くのも危険性が出て来る。そこまで考えて、ふと

疑問が浮かんだ。

「待て、番長とやらに会ってどうする気だ？」

目的を聞くのが遅すぎたくらいだ。興味があつたのは……まあ、正直俺もだから気持ちも解るし、非難する気も無い。見に行きたいのなら理解してやる。だが、何故わざわざ会う必要がある？

「この世界でSOS団団長より偉い存在が無いという事を教える為よ。こんな小さな街で、小山の大将気取りの奴なんか目障りだわ」

聞くだけ聞いて、俺は遠い空を見上げた。平和だなあ……。宇宙人、未来人、超能力者が集まる団体だぞ俺らは。そんな激レアな存在が、一介の番長風情の為に足を運ぶのもおかしい気がするんだがなあ……。要するに、行く気失せましたという感じだな。

そして、最後に心の中で強くツツコミたい。

小山の大將はお前もだぞハルヒよ。

「あらあ、あなたたち」

不意に脇道から声がした。

「おや、南春香さんじゃないですか。これはどうも」

SOS団は五人とも足を止め、南さんが買い物袋を持っているのを見た。

「そっちは……妹さん？」

ハルヒの声に、南さんの隣にいた小学生がペコリ。

「あ、そうだ。あの話聞きたかったから……良かったら皆さんで家に来ませんか？お茶だけでも」

本当に高校生かと聞きたくなるくらいの、気の利く対応と大人びた感じ。それを見てから、朝比奈さんを見た。

「……？なんですかぁキョン君」

南さんと同じ年……ありえん。

そして数分後、マンションに到着。長門の住んでる所に比べれば小さいが、それでも立派な造りだ。

エレベーターで上に上がって自宅まで来た。

「ただいま」

南さんに続いて、俺達も中に上がらせてもらう。茶の間で座って南さんがお茶を入れて戻るのを待っている事にした。

それにしても、落ち着く部屋だな……。長門なんかテーブルの上にある熊の縫いぐるみを弄り始めている。

「お待たせ」

南さんと先程の小学生がお茶とお菓子を持ってきた。

「今夜はカレーだから、皆で夕食食べていって下さいね」

流石に恐縮。代表でハルヒが丁寧にお断りするのを横目に、妹の小学生（千秋ちゃんと言うらしい）が長門をじっと見つめている事

に気付く。熊の縫いぐるみ……そうか、これは彼女のか。

「……」

「……それ」

長門が千秋ちゃんに縫いぐるみに手渡す。今、どっちが喋った？

「春香姉様……さつき夏奈のバカヤロウが藤岡とキスを」

南さんは千秋ちゃんが手にする縫いぐるみを眺めて、溜息。

「そろそろ洗っても良さそうねえ。夏奈ったら不衛生な事して。」

千秋ちゃんは首を横に振った。俺達は特にやることも無く、本題へ入れずに二人のやり取りを聞くくらいしか出来ない。

「いえ……ですから、夏奈と藤岡が部屋で」

一瞬、空気が凍ったのを感じた。俺達是最悪のタイミングでお邪魔してしまったのではなからうか？

「さあ千秋、今日は私のお部屋でいい子にお勉強しようね」

盛大にごまかした。ハルヒと朝比奈さんは勝手にテレビを付けて寛ぎモード。俺と古泉、長門の視線を一気にあびる南さん。

「春香姉様、まさか若い男女が部屋でする変な事というのは……」

半開きの目で何と言う質問をしてくるんだ？小学生女子よ。俺も

助け舟を出すべきか？しかし……

「あなたの疑問には、私が適切な解答を出す。」

俺は首が痛くなるくらいの早さで横を向いた。
忘れてはいけない。歩く百科辞典、長門有希だ。

「駄目だ長門。お前の知ってる情報を彼女に教えちまった後の事を考えてみる。」

少し考える間を置いて、じつと俺を見てくる。
そして、だんまりが始まったので長門の説明する気が失せたのを
千秋ちゃんも気付く。

「では、春香姉様の部屋で勉強をしていますので。」

頭のホイップを揺らしながら退室。さて本題だな。
ふうと息をついてから、南さんは真剣な表情。

「それで、どうでした？変な視線の贈り主の正体は。」

姿勢を直して、俺が答える。

「それが一年の女子でしたよ。南さんと同じ中学の。」

嘘をつく手筈を古泉と話していたから、SOS団は誰も突っ込まない。

やはり気持ち悪い先輩に、ストーカーされてましたと言って本人を余計に悩ませては……なんか釈だ。またあの男の顔が脳裡に浮かぶ。奴を庇ったみたいでム力つくオチだな。

「それが聞けただけでも大分安心よ。わざわざごめんなさいね。」

いえいえ、お気になさらずに。

とか言いつつも内心では、保坂先輩がこの先も視線を送り続ける事を知っているわけだ。

哀れなり、暫く気付かれないであろう気持ち悪い奴。

それから南さんがSOS団がどのような活動をしているのかを聞かれ、上級生からの評判を教えてもらったりした。ハルヒは聞く耳持たなかったがな。

ガラガラ……

扉が横にスライドされた音に、俺は目を向けた。

キョトンとして俺達を眺めるのはツインテールの女子中学生と金髪の男子だ。よく見ると男子の方は顔を真っ赤にしながら、頼にサッカー日本代表を応援する際に使用する国旗やらマークがペイントされていた。それもデカデカと歪んだラインで。

「春香、友達か？」

「あ……うん。それより夏奈、藤岡君と仲良いのは解ってるけど……」

いきなり出て来た妹と彼氏に対し、早くも言ってしまうのか南さん？

「現れたわね！番長！」

春香さんの言葉を遮り、ガバッと跳ね起きるようにして立つのは涼宮ハルヒである。

気まずい空気を掻き消してくれたのは有り難いが、朝比奈さんじやなくてもビックリだこんちくしょうめ。

「おお……何と、番長伝説を聞いて来る人が現れようとは。」

夏奈さんとやらがハルヒの目を見て一歩後ずさり。

「この街で長の名を語っているのは市長と店長と団長くらいなの！小山の大将気取りで番長なんて肩書使わせないんだからね！」

ハイ、そこ。マンションで騒ぐな。社長や校長はこの際無視か？いくらでもツツコミ所が有りすぎたので、とりあえず俺はため息を吐いて視線をハルヒから夏奈さんに移す。

「……………」

表情もポーズも固まったまま夏奈さんは数秒黙り、それから口を開いた。

「そ……それで？」

思わずズッコケそうになった。古泉は頬杖をしていた手をズルッと滑らせ、朝比奈さんはテレビに夢中。

「私達と勝負して勝ったら番長の座に留まっても構わないわ。ただし、負けたら伝説その物も無かった事に……どうよ？」

ハルヒ的なペースを崩されたのだろう。いつもより引き攣った感

じの強気笑顔。

対する夏奈さん。というか、対峙すべきは彼女では無いよな。思
い出して番長である彼氏を見る。

「み……南い……」

両手を膝の上に置き、正座して二人の間で気まずそうにしてい
る。何だか目茶苦茶弱そうだ。

「あのう……だったらサッカーで勝負って言うのはどうでしょう？
今夜のテレビ中継前に、体動かすのも楽しいかもですよ？」

横から意見を出したのは朝比奈さんだ。これまた珍しい。

「よしそれで行こう！藤岡、ボールだ急げ！」

なんと、ハルヒの意見を待たずにサッカーに決定した。何と言う
生き物だ彼女は。

「受けて立つわ。キョン、古泉君、有希、みくるちゃん、急いでメ
ンバー集めよ！」

電話一つで集合場所に来てくれたのは、鶴屋さん、谷口、国木
田のいつものメンバーだ。

「何だ何だキョンよ」。また涼宮のトンチキな行動に巻き込む気が
し？」

来てから文句を言うな。

「でもさ〜今回は普通にサッカーなんでしょ？楽しもうよ」

楽しめる状況なら良いんだが。

ふと、夏奈さん達の方へ目を向けるとメンバーがゾロゾロ集まっているのに気付く。

ちよつとまで。サッカーは1チーム11人でやるスポーツだよな？何か小学生が多くないか？

「フフン、問題無いわ。何て言ってもこちらには……」

そう、ハルヒが示す先。厳しい眼差しでグラウンドを見つめるのは、依頼主である南春香さんだ。

彼女は‘SOS団が勝利した場合に、番長伝説をこの街から無かった事にする’よう心掛けるという条件を受けた途端に、南家を裏切って仲間になってくれたのだ。きつと捨て去りたい過去があるのか、それとも無いのか……

「ちよつとキヨン。後二人は？」

そうだった。俺達団員の五人＋準団員三名と南さん。まだ九人だ。俺は古泉に駆け寄る。どうする？誰かあてはあるのか？

「いきなり森さんや新川さんが来たら、変に思う可能性があります。田丸氏兄弟も同様ですから……」

ここで機関の新キャラつても変だよな。知らない奴仲間にサッカーってのも微妙だし。それを考えたら未来人、宇宙人も同様か？

「うう……すみませんキヨン君」

いいえ気にしないで下さい。悪いのはハルヒと夏奈さんですので。

「……策はある」

長門はそう言って立ち去った。誰か読んでくるのだろう。

「ちょっと、有希は？」

ハルヒがツカツカと近寄る。

「ああ、長門ならメンバーを呼びに行ったぞ。ほら……」

俺が長門を指差すと、見覚えのある姿を連れていた。

「喜緑江美里さんですか……」

古泉が目を細める。喜緑さんの後ろにもう一人いるのが確認出来たが……俺は思わず逃げ出したくなった。

「あ、戻って来てたんだ……」

阿保の谷口は鼻の下を伸ばしている。その横で国木田が冷静に、対象へ微笑みかけた。

「誰だっけ？」

ハルヒは少し考える仕草。おいおい、忘れちゃったのか？同じクラスだったろ？

「久しぶりね。キョン君」

近付かれ、後ずさる俺。何でお前が俺達の前に平然と現れるんだよ？どうしてここに……

「朝倉涼子……」

「そんな顔して、まるで幽霊でも現れたみたいなりアクションね。」

俺は長門に視線を送る。どういづつもりだ？なんで朝倉なんかを……。

「それはね……」

よそ見をしていた隙に朝倉が急接近。まるで内緒話でもするくらいの距離に近付き、俺の耳に直接息がかかるように話しかけて来た。恐怖感と恥ずかしさが同時に襲う。

「涼宮さんと直接面識があり、急に帰って来た所でいくらでも理由付けが出来る存在だからよ。」

だからって、あの時の事を忘れたわけではない。都合よく現れやがって。俺の精神衛生については配慮無しか？

「いいじゃない。私達二人の秘密って事にしておきましょう？」

ドキドキする展開にも限度があるんだよ。あとお前、後ろから長門にガン見されてるからな。

そんなこんなでサッカーを始める様子だ

では、メンバーの紹介。

GKは古泉になったが、基本的に好き勝手動く連中ばかりなのでポジションは省く。

俺、ハルヒ、南春香さん、長門、朝比奈さん、古泉、鶴屋さん、谷口、国木田、喜緑さん、朝倉となった。

「よし、こっちもそろったよ」

夏奈さんがふて腐れ顔の千秋ちゃんを引きずり、歩いて来た。メンバー表を見ると次の通り。

夏奈、千秋、藤岡、内田、冬馬、マコ、マキ、アツコ、芳野、ナツキ、謎の覆面H。

あちらは他にも小中学生の控え選手がいる。やたら体格のいい覆面Hは……やはり彼なのだろうと、心の底からうんざりした。誰が覆面Hを連れて来たのか、それとも着いて来られたのか定かでは無いが……彼ばかり相手にする気は毛頭ないのだ。

かくして覆面で来た浮いた存在を無視して、試合開始のホイッスルが鳴らされたからである。

審判は……サラリーマン風の男性だ。おいおい、何処から拉致つて来た？南さんの所の知り合いか？まあ特にイジる要素も無さそうなので、声をかけずにいる。

試合そのものだが……結果から言おう。ぐだぐだな物になった。まっつた。

こっちには本気で試合なんぞする気の無い俺と、無垢で愛らしい未来人に無口で傍観者な方の宇宙人がいるんだ。くそ真面目に参加しようとした古泉はキーパーでかやの外。喜緑さんは小学生とニコやかに話しているし、谷口と国木田なんてただの人数合わせだ。

しかし、この状況で何もせずに終わらないのが涼宮ハルヒだ。ハルヒの指揮で朝倉と南春香さんと鶴屋さんが、四人一気に常時オフエンスに徹した。

金髪の中学生、藤岡君がサッカー経験者らしかったが……常軌を逸した運動能力の高さである四人の女子高生（一人は宇宙人だが）を相手に出来る訳が無い。強敵だった覆面Hも、南春香さんが粉砕した。ナイスだね。

30対0になってから、夏奈さんが口をへの字に曲げてハルヒに近づいた。

「こーさんだっ！」

ずっとこけちまったではないか。自分から挑んだ勝負だというのに、あっさりすぎるぞ。

彼女の後ろには激しく悔しがる藤岡君。そして冬馬君とかいう小学生他。そういえば千秋ちゃんの姿が見当たらないと思い、見回してみると少女は覆面変態男と話をしている。逃げろ、関わってはいけない。

「あの……試合中気になっていたのですが、いつかのカレーの妖精さんではないでしょうか？」

ホイップ少女の質問に変態男は首を傾げる。

「妖精……違うな、俺は南春香の為に命をかけて戦う覆面戦士だ」

覆面戦士、汗で湿って気持ち悪いから。何かあっては危険だと、俺は千秋ちゃんの側に近寄ろうとする。

「春香姉様の為……」

死んだ魚の目のような眼差しで考えている千秋ちゃんは、何か考える仕草をしたあと。

「あなたのカレーのレシピを伝受していただきたい。」

まてまて、落ち着け千秋ちゃんよ。相手は変態意外でも他にいるだろう？

「そーだぞ千秋、そんな訳解らん人に教わらなくても私が」

俺が説得してやろうとすると、姉の夏奈さんが割って入る。が、しかし。

「黙れこのバカヤロウ。お前低度のカレーテクで春香姉様が満足している訳がないだろバカヤロウ。ついでに訳解らん相手をチームに入れたのはお前だろバカヤロウ。というか訳解らんとか妖精さんに失礼だろバカヤロウ。オマケにもう一つだバカヤロウ。」

「ご…五連続バカヤロウっ！新記録じゃないか！」

何やってんだこの人達。そしてどれだけバカヤロウなんだ君は。

「とにかく私は春香姉様の為にカレーテクを伝受してもらう必要があるんだ。邪魔は許さないぞ。」

「待て、待つんだ姫。」

「私を……姫と……呼ぶなあゝ！」

どこからか出した熊の縫いぐるみで姉を殴打し、覆面Hと共に歩き去る姫。

「しかし、あの容姿の危険人物を彼女と二人キリにするわけには」

古泉が長門と一緒に合流した。長門が殴打された中学生女子を抱き起こす。

一方のハルヒと朝比奈さんは、小学生達と語らいながら楽しそうにしている。鶴屋さんや南春香さんなどの年長者も見ていることだし、放っておこう。

「フム……これが南春香の創りしカレーか」

俺と長門、姫と夏奈さん、古泉と保坂氏が広いキッチンに集まる。

「良い味だ。余計な小細工を無くした味付けに、具の選び具合も抜群だ」

おおゝとか姫と夏奈さんが言ってるが、見たところ普通のカレーに感じる。市販のルーも置きっぱなしだし。強いて言えば三人姉妹で食べる量ではなかったという事か。

「手を加える必要性等ない。これは愛という最強のトッピングが入った素晴らしいカレーだ。」

「妖精さん、私は……私の手で春香姉様に手料理を作りたいのです。」

素晴らしきかな姉妹愛。妹も俺の為に手料理を作る日が来るのだろっか。

「では教えよう……メモをとれよ」

早く終わらせろよな。

「全ては愛のターメリック。ハラハラハラペーニョ。泣かれちゃやだもん、シナモン、カルダモン。無理かパプリカ、コリコリコリアンダー。錯乱してサフラン、ちょこつとチョコレート、今更ガラムマサラ。でも明日があるもん。シナモン、カルダモン。おいしいカレーの出来上がり」

天を仰ぐかのようにいきなり歌い出した彼を誰が止められよう。何故歌で現したのかは問うまい。この男が変態だからという理由で全て片付けられよう。ああ、気持ち悪い。

「メモ……取れなかったけど」

夏奈さんの呟きにずっとこける俺。流石五回も馬鹿野郎と言われただけの事はあるなあ。

「私を書いて状況の收拾をはかる」

長門がさつさと書いているのを千秋姫が見守る。成る程、さつきの歌詞はスパイスを入れる種類になっているのか。

「それじゃあ、さつさと下にいる連中と合流しようぜ。勝負に負けたんだ、ハルヒの奴が無理難題を追加するまえに大人しく言うこと

聞いて解散しちまおう。」

何偉そうな事言ってるんだろっね俺は。相手は今日知り合ったばかりの中学生だというのに。

「うゝむ」

ホイップ少女は顎に手を置いて考え深げに俺を見た。

「どした？また妙なあだ名でも思い付いたのか？」

外靴を掃きながら中学生女子が千秋ちゃんに聞く。

「うむ。だが……本人の目の前では発表しかねるぞ」

だったら遠慮しとくぜ。キョン以上に変なあだ名付けられた日には……涙で明日も見えなくなっちまう。

千秋ちゃんは何故か長門にだけ耳打ちしてから離れた。

その後、ハルヒVS南夏奈さんによる「団長と番長談議」が熾烈かつ無意味に続いたが割愛させて頂こう。

そうだな、何だかんだ言ってカレーもご馳走になった。

どっという訳だか途中から覆面Hが居なかったんで、違和感無く食事を楽しめたぞ。

夕飯を食べ、解散となり俺達SOS団も帰路に着いた。

恐らくハルヒも番長やらストーカー騒ぎやらで暇を潰せたことに満足出来たらしい。何も後腐れ無くお別れ出来たからな。

多分南家の方々と絡む機会は、この先無いかも知れないが……楽

しかったという想い出だけ忘れないでおこう。

さて、帰路に着く俺なのだが……道なりに歩くと長門と途中まで一緒なのが必然だ。ここで長門が「一緒に帰りたい」等とわざわざ口にしてくれようモノなら、俺はリアクションに困り今現在踏み締めているアスファルト並に固まってしまっただろう。

「そっぴやさ、さっきの千秋姫が言っただ俺のあだ名って何だったんだ？」

ほんの少し間を置いてから。

「……それは貴方の精神衛生を害する危険性が発生する。秘密」

偉く気になる返しだが……長門にそう言われたら深追いしたくなかった。

「じゃあ……」

南夏奈さんと藤岡君が部屋でしていたのは、俺が考えているような淫らな行為だったのだろうか？等と頭の中では考えてしまったが、目の前にいるのは長門。宇宙人といえども女の子。聞けないって絶対！そんな事を少しでも思考した自分が恥ずかしい。

「貴方の聞きたい事は理解した。」

マジかよ！勘弁して下さい。俺は今、長門に精神的凌辱を受けたみたいで……もはや長門の顔を見られない。

変な事考えてすみません。

てか人の頭の中を読み取るなよ……。

「気にしなくていい。いつもの事……それより」

長門が話を続けようとしてるのだが、ツッコミを入れた方がよかっただろうか。

「先程の二名が行っていた事を教える。」

俺は言われるがまま、ベンチに座らせられる。

長門はポケットから水性ペンを取り出し、おもむろに俺の顔に落書きを始めた。

って、ちよっと待て。

「動かないで。」

長門の顔が至近距離にある。なんだ、この羞恥プレイは。抵抗出来ん。

すぐに書き終え、長門が俺の頬に息を吹きかけてくるのが解る。そうか、つまり南夏奈さんが藤岡君にやっていたのを姫が誤認したと……。

それは解ったが、長門よ。いつまで至近距離に顔を近付けたままにしておくつもりだ？

夜道に男女の高校生二人。男は座ったまま、女は男の顔に自らの顔を近付けた状態で静止。誤解を招かないわけがないよなあ。絶対ヤバイって。

でも、何と無く。暫く今のまま長門を放っておいて、動かないのもアリではないかと思ってしまったのさ俺は。

そんなヨコシマな考えを持ったのを察したのか、長門は何も言わず背を向け歩き去った。

「ま、日常なんてこんなもんさ。過度な期待はしない方がいいってか……」

最後の独り言が長門に聞こえなかった事を祈り、家路についた。

（後書き）

後半に飽きが来て、集中力が無くなったのが丸解りかと。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0877o/>

涼宮ハルヒの平凡な日常

2010年10月10日22時38分発行